

山と博物館

第10巻 第7号 1965年7月25日

大町山岳博物館



…… 積極的な自然保護を……

最近、国や、県の施策の中に、「自然保護」という言葉が目につくようになった。結構である。生活が多少でも安定し、平和に日々が過ぎせるようになると、今まで気にもとめてみなかった「自然」に魅力を感じる。ただ困ったことに、「自然」のトリコになつていくのだから妙である。ただ困ったことに、庭に木を植え、小鉢に山野の草花を持ちこんで悦に入っている人たちがめっきりふえてしまった。実生のヒメコマツがあるといえは、その山へ蟻が集まるように殺到し、日参して、たちまちハゲ山のようにしてしまふ。珍しい石があるといえは、トラックを入れて拾い集める。庭や、部屋の片隅に置いて楽し

むのは程度のいい方で、採取してから旬日を経ないうちに店頭に出してブームをおおる。東京の高校生が絶滅寸前の蝶をあさる。教師が高山植物を荒した話もある。観光開発で、自然が荒されるという。「自然」を売物にする筈の観光事業にしてそうである。国や県が今さら自然保護をいうもおかしな気がしないでもないが、十数年前から自然保護を訴えつづけている大町山岳博物館の仕事をもっと広く理解してほしい。学校関係でも教科書にとり上げるくらい熱意を見せてほしいと思う。絶滅しそうだといいて騒ぎ出しては遅い。保護するために学術的に研究、調査し、運動している博物館の予算は少ない。国も県も、本腰を入れて自然保護を徹底する手段を考えて貰いたい。

田 中 保 平

ノルウェー便り (その4)

「スキー博物館」を訪ねて

太田昌秀

スキー博物館は、ホルメンコトレンのジャンプ台のアプローチの下を利用して、作られています。ジャンプ台は急な山腹を利用したランディングゾーンと、丘の上に五四mの高さに美しい曲線を描くアプローチから出来ており、スロープの一番下には小さな(百m×五〇m)湖が二つあります。

私は赤ん坊の乳母車を押して「く」の字に斜面を登り、ジャンプ台の下をくぐりぬけて博物館の前に立ちました。余り広くない前庭には、二m位の台石の上に有名な極地探検家アムンゼンの巨像が、オスロの街を見下ろしていました。

博物館の入口には、この国の石器時代の人々が石の上に刻み残したスキーをする人の絵がかけてあります。影絵のような素朴な線で、スキーをつけた人が走っている姿は、これがかいた古い時代の素朴な人の心をそのまま現わしているようで、印象的でした。

館内はそんなに広くありません(山岳博物館の三部屋分位)が、六つの部屋にわけられていて、明るく美しく飾られていました。

はじめの部屋はこの国の最も古いスキーの展示で、信州のワカンジキと全く同じ、雪の上を歩く道具とか、藤つるのようなものでエスキモーの毛皮の靴のような無格好なものを、しばりつけてあるスキーなどが沢山ならんでいました。スキーはどれも先端の曲りが、足の近くからはじまつていて、幅も次第に細くなつてゆきます。その大きいのは驚くほどで、乗

に二m五〇はあるでしょうし、幅も二〇cm位ある大きな一本材でした。しかし短いのもあって、幅は同じですが一m以下のもありました。随分古い時代からシールのようなものが使われたらしく、スキー全体をアザラシの皮で包んだのもありました。

二つ目の部屋と三つ目の部屋には中世(一〇〇〇年〜一七〇〇年)のスキーで、何ともその大きいのに驚かされました。バイキングの頃からいくつかの戦争が、こういうスキーをつけて斗われ、平和な日々にはこのスキーをつけて人々は野山を駆けまわって、獣を追ったのでしよう。靴や縮具の変化、バツケン

の部分の工夫などが時代と共に変つてゆくのがよくわかりました。こうした時代には、杖は一本しか使われていないのが特徴です。

四番目の部屋は近代のスキー、主に競技スキーの発展が面白く展示されています。はじめて一本杖の男がジャンプを試みた絵、ホルメンコトレンの昔のジャンプ台の絵などが飾られ、このジャンプ台で競われた、いくつもの大きな大会のメダルが集めてある中には、「札幌スキークラブ」のバッジがありました。

五番目の部屋は、アムンゼンが極地で使った用具が陳列してありました。アザラシの皮を、そのままソリにしばりつけた犬ソリ、細身の長いスキー、大きな皮靴や、やはり毛皮でできた小さいボートなどが印象的でした。

最後の部屋は、彼等の使った食器やら、衣類やら、注射器などに至るまでがきちんと陳

列ケースにおさめられていて、あのきびしい南極の寒さの中で、彼等と苦勞を共にしたこまごまとしたものや日記帳などは、この国の若い人々に、きつと深い感慨をこめて見られていることでしょう。

いろいろ書き並べてしまいましたが、考えてみると、どうもこれといってとくに印象に残るものはないように思います。一番印象に残っているのは、入口にかかいられたスキーをする人の絵でした。私が余りはつきりした印象を持てなかつたのは、この国のスキーの歴史について、充分な理解を持てなかつたので、よく解らなかつたせいだと思えます。この国の古い神話の中にはウラーという、スキーの神様がいて、それにまつわる楽しい話もきつと沢山あることでしょう。今年の冬は私も、もっと勉強して皆さんに面白い話をお伝えしたいと思えます。

そんな訳で、私達が一番感激したのは、このジャンプ台のテツペンからの眺めでした。エレベーターを九合目まで上り、粗い材木で作られた暗い階段をいくつか登ってゆくとアプローチの頂上につきます。

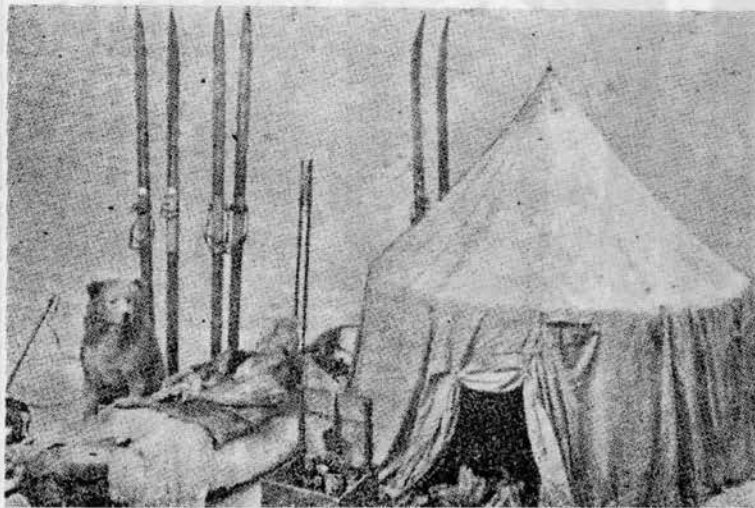
アプローチは上から見ると、下で想像したほど恐ろしい感じはしませんでした。美しいカーブの下のランディングゾーンは全然見え、はるか下の湖だけが見えます。その先は小さい丘の観覧席の向うに、オスロの街がすっきり見わたすことができます。遠くのフィヨルドに白い船が浮び、陸地の中にも至るところに小さい湖が光っていました。

この頂上の部屋にも、階段の壁にも至るところに落書の署名がいっぱいでした。きつとこれらの名前の中には、世界的な大選手の名前も沢山まじっていることでしょう。

日本人の名前も二、三ありました。私が心配したのはこの頂上にトイレがないことです。私の経験ですと、とても高いスロープの上立って、緊張してスタートを待つときというのは、不思議と小便がしたくなるものです。しかしこゝに集まる選手達はみんな世界一流のジャンパーなので、そんな緊張はなく、軽い気持で美しい飛躍を楽しんでいるのかもしれない。

◆ ◆ ◆

アムンゼンのテントとエスキモー犬



若一王子神社

大町市 俵町

巾 具 義

若一王子神社は、仁科神明宮と共に古来仁科氏の氏神であつて、若一王子・仁品王・妹耶姫・伊弉册尊・天照大神の五柱を祭神とする。その創祀については、仁科次郎盛遠が、現在の和歌山県東牟婁郡本宮町の熊野坐神社第三殿若宮を勧請したと伝え、また同県同郡那智町の熊野那智神社第五殿若一王子宮を勧請したものと伝えられているが、いずれもその根拠とするところは定かでない。当若一王子神社は、明治維新の神仏分離までは若一王子権現と称せられ、神仏習合の祭祀形態をもっていたことは、現在境内に、もと十一面観音を本尊とした観音堂(現在の被殿)と、それに附随した三重塔を残存していることよつて判然とする。さらに、先年若一王子神社の御正躰であつた懸仏の仏体(全高七・二五寸坐像、鏡板を欠く)が発見されたが、この仏体は十一面観音像であつて、観音堂の本尊が十一面観音であつたこと、また熊野三山のうち熊野那智神社の御正躰が十一面観音であることとされていることなどから、この限りでは熊野那智神社を勧請してきたものではないかとの想定もなし得る。何れにせよ、仁科氏の熊野信仰は、承久記にも仁科盛遠の熊野詣でを載せていることよつて明らかであり、平安時代末期より漸く高まってきた武士や一般民衆の熊野信仰の風潮は、仁科氏をして、仁科御厨司の地位から仁科神明宮を奉祀するとともに、新たに大町の都市計画の北端に熊野勸請をなさしめたものである。

このように仁科氏は、仁科神明宮と若一王子神社を併祀する上から、両社は必然的に深いつながりをもつようになり、特に神事の上ではこれが強かつた。明治維新までは、仁科神明宮の三神主が若一王子神社の神職を兼務

し、祭日も神明宮の六月十六日につぐ十七日とされ、松本藩主の寄進になる祭免十二俵も三神主受領の上その四俵を王子祭典に充て、また流鏑馬神事も両社一体の形で奉納されてきた。現存する若一王子神社境内の宝永三年(一七〇六年)建立の旧観音堂棟札には、「金峯山神宮寺弘誓堂白」の文字が見え、同じく同八年建立の三重塔棟札には、さらに明瞭に「社僧金峯山神宮寺弘誓堂白」と記されているが、この弘誓は仁科神明宮の神宮寺の僧で



あるので、ここにも仁科神明宮と若一王子神社の不可分の関係が明瞭である。

つぎに建築史上稀有な作風の同社本殿について、その特色ある点に着目しよう。

現存の本殿は、江戸時代に模写したと思われる棟札写には、

仁科修理亮盛康 浪田見長生寺盛近

王子宮造営奉行

弘治二丙辰年九月 仁科四郎三郎盛冬

と記され、弘治二年(一五五六年)の造営になつたものようであるが、この棟札には疑義の

存しないでもない。降つて承応三年(一六五四年)の棟札には、

(表墨書銘)

水野出羽守源忠職公御代

奉造立王子宮 仁科大町惣氏子中

承応三甲午年十一月吉日

(裏墨書銘)

新始 六月廿七日 大工 当所 金原周防

棟上 十一月十四日 同五兵衛

小工 数十人

工数千三百三十三人

と記され、大々的な改修を施しているのであるが、その改修の大なるにもかかわらず、改修以前の古い建築様式をよく残している。なお、承応棟札に見られる通り、金原周防が大工棟梁として記されているが、金原氏は大町在住の宮大工であつて、代々当地の社寺建築を担当してきて居り、その特異な作風は注目すべきものがある。

現在社殿は一間社、隅木入春日造で雨落を廻し、土台上に柱を立てる。向拝は土台上に束を立て浜床を設け、柱は角柱面取、拳鼻附二手先組物を載せ、実肘木をもつて桁三本を支える。中備には養股をおき、拳鼻実肘木附出組をのせる。母屋とは海老虹梁で連絡する母屋は、円柱で足固貫、頭貫を通し、縁長押・内法長押をつけ、貫肘木付平三斗及び養股で桁を支える。正面は方立付板扉、他の三方は板壁、妻飾は虹梁大瓶束拳鼻附で、軒は二軒檼、切裏甲、屋根は正面入母屋造、背面前切妻造、檜皮葺、箱棟を載せ、鬼板、かぶら懸魚をつける。三方にくれ縁を廻し、擬宝珠高欄を設ける。

以上の建築様式を通じて、縁の腰組、高欄の斗束、向拝の組物、とくにその内側の拳鼻上に積み上げられ拳鼻を幾重にもつけたところ、海老虹梁の根本の装飾、向拝の懸魚など各所に全く奇抜な手法を用いているのであつて、地方的色彩が強く、多大の野趣を帯びている。

博物館だより

◇カモシカ幼体付属動物園に入園
六月九日に、長野県小県郡真田町字傍陽で春原悦男氏に保護されたカモシカの仔が、六月二十四日に山博に引取られました。現在、四七日令たちましたが、体重五、〇kgと、入園当時より倍の大きさに育ち、毎日一〇〇ccの山羊乳を飲んでスタックと育っております(表紙写真参照)

◇イヌワシの幼体を保護
大町市平区白沢地籍にて損傷し、飛べないでいるイヌワシの幼体を市内大新田町の小林義一さんが保護し、現在山博裏で保護飼育しております。なお十三年間飼育してきたオスのイヌワシがいるので、引取られた幼体がメスであれば、夫婦縁組も可能であり、動物舎移転の際に一緒にする計画であります。

山博協議会開かる

市立大町山岳博物館協議会は七月六日、大町商工会議所において開かれ、動物舎の移転山岳博物館扇沢分館の建設促進、など昭和四十年年度事業計画や、総額六三二万円にのぼる新年度予算内容など執行につき検討を加え、また新協議会委員長に荒山幸久氏、副委員長に宮下潔氏を選出した。席上扇沢分館の問題については、五人の代表委員を選んで、それぞれの問題に対処、推進することになった。

寄附ありがとうございました

柴田藤三郎 パンフレット三万枚、福島山路 押絵ビナ十五点、岡村啓 雪グツ、山口節義 古文書、糸車、片手切、傘木伸二 養蚕用具一式、ロータリークラブ八万九千円、道田 広治 コサギ、小林義一 イヌワシ、平林正彦 ムササビ、昭和義工 アオバズク、中島昌訓 キジ、一柳達夫 カルガモ、中村実夫 サンショウウオ、保健所 サンショウウオ、近江伊左エ門 イタチ三匹。

山の詩歌碑

福沢武一

小杉放庵歌碑

—大町市葛温泉仙人岩—
 正午すぎ、大町駅前までバスに乗る。曇り勝ちで、折角の北アルプス連家が見えないのは残念。リンゴの実った台地をぬけ、高瀬川の峡谷へはいって行く。
 小さい曲路を繰返す。小一時間——それ以上だったかもしれない。して終点、下車。澄みきった川を渡って、温泉宿にあがる。
 一まず休憩した後、同行四人で拓本にでかける。これは予定の行動。仙人岩まで引返す。小杉放庵画伯の歌碑があるのはここ。河とバス道路との間の草地在らわられた直後で、岩の上の碑が道からもそれと知れる。
 岩場をのぼって、碑の前に立つ。高さ一メートル、幅一メートル半を越える。のっぺりした岩が坐っている。これ以上の安定感があるとは思われない。ややおうむき加減な肌がつづらのあるところだけ明るい。
 やや見葉しんだ後、拓本にかかる。湿った空気。そよとの風もない。絶好のコンディション。墨色の中に字体がまっ白に浮んでくる。雅致ゆたかな運筆なのだ。
 岩のうへに高あぐらしてまねきなばより
 ても来べき秋の雲かな

昭和十五年秋 題「仙人岩」 放庵

これは放庵の代表作とされている。いささか古風な一歌。それにしても、すがすがしい心地には同感できる。峡谷の岩上、——いまここがそれなのだ、安坐はともかくも、しばしたずんで、爽やかな空気を深々とすう僕たちだ。
 氏は本名国太郎。明治一五年、栃木県日光の生れ。長じて洋画を志し、上京。未酔の号で挿絵から出発した。大正三年、大観らと共に

に日本芸術院を再興するまでになっていた。枯淡な世界にあこがれ、東洋味にとんだユニークな画風を完成した。一方短歌をたしなみ気のむくままに詠詠した。「山居(昭二六年)」ほか、歌文集が多い。画と歌と、——氏にあっては共に心を放つための一つのものだった。氏は戦前から赤倉に山荘を営んでいた。戦後はここに定住した。碑の一首もそこでの産物。昨年四月、しづかに限目したのも赤倉の高原においてだった。
 再び温泉へひき返す。その時、正面に立ちただかるのは唐沢岳。雲のきれ目から日がこぼれ、紅葉した頂の岩肌が輝いている。



翌朝、うすぐらいうちに目がさめた。一人で風呂につかった。外には潮音ばかりか、雨の音がそらそうと鳴っていた。思う存分湯につかった。

朝食は唐紙をはずして連座になる。この時初めて気がつく。隣室の欄間に碑歌の筆書きが扁額になって掲げられていたことに。紙はすずび、所々小穴があいている。これこそ歌碑の原本だったことはいままでもない。山の風味にとんだ食事が終り、そそくさ身支度にかかる。雨はどうにかやんでいる。

高山蝶類の保護について

福島 融

霧は気まぐれに流れている。
 バスはすべり出す。こんどは仙人岩の碑を窓から見のがさない。そのずんぐり黒ずんだ顔がこちを向いてわれわれを見送っている。
 最近高山生物が激減しつつあるという。これは自然の利用にその保護が追いつかないためであろう。今朝も新聞の投書欄に或る高校の先生が「高山チョウを大切に」という見出しで概要次のような訴えを寄せていた。それによると昨年この方は白馬岳でお花畑を踏みこじりながら高山チョウを手当り次第乱獲している男をみかけた。又このような場面はこの山のみならず、上高地、濁沢、八ヶ岳、蓼科山など当然採集を禁止されている国立公園やそれに準ずる区域内の各所で目撃しているというのである。そしてこの花盗人ならぬ虫盗人はいわゆる虫屋と呼ばれるプロや心ない蝶の収集マニアに多く見られ彼等はこれを売ったり交換したりするために見つけ次第情容謝なく取りつくしてしまおうである。その証拠に天然記念物である菅のウスバキチョウまでが何と数千円で売買されている事実を知っている。と嘆き憤って書かれていた。私も全く同感で又同様な経験をもつものであるが一般に昆虫に興味を持ち始める一時期はその名前や産地を調べるために採集を必要とすることがあるが切手収集マニア的な採集に陥ってはならない。珍稀を追い稀少価値を求め余り氷河時代の昔から生命を保ち続けて来たこの可憐な虫達を絶滅の淵へ追いやってしまからである。特に昆虫の場合は植物や雷鳥と異なり一般の登山者につかまえられるという心配は先ず考えられぬから前述のような悪徳採集家を取捕れば大分効果が上るものと思われる。上高地のミヤマシロチョウ、徳沢のヤリガタケシジミ、横尾谷のクモマツマキチョウなど開発の進んだ処では特に減少甚しく

最早風前の灯といったピンチな状態だというこれ等は乱獲もあるが登山路の改修拡張やキャンプ地の拡大などで昆虫の棲家が極端に狭められたことも大きく影響したのではなからうか。事実扇沢のクモマツチョウは黒四工事後以後畧んど姿を見せず心配されている。このように電源や観光開発による棲息地の狭小化と乱獲の挟み打ちにあって今や高山昆虫特に高山蝶といわれる一群の蝶類は絶滅の危機にさらされていると言えよう。そこでこれ等の保護のためには文化財保護委、厚生省、林野庁など関係諸機関がより積極的な態度で少なくとも高山植物並の監視とモラルの啓蒙に力を入れていた、きたいものである。例えば捕虫ネットを持った人には監視員が必ずその許可証の有無を確認るとか監視員自身も高山蝶の種類や生態(卵、幼虫、蛹などの採取も考えられるので)の常識的知識を予め教育を受ける等対策を練る必要がある。そして我々昆虫に興味を抱くものは出来得れば以前にも紹介した有名な高山蝶研究家田淵氏の様に殺生をタブーとして標本の類を全て蓄えないという良寛の境地にまで達したいものである。研究のため止むを得ず採集しても観察が終れば又もとの山野へ放してやる程の態度で虫達に接したならば彼等は必ず永遠にその種族を絶やすことなく伝え続けていくことだろう。(山博学芸員)

表紙説明

生後四〇日目のカモシカの仔(オス)
 撮影 千葉 彬 司

山と博物館 第10巻第7号
 一九六五年七月二十五日発行
 発行所 長野県大町市TDL(大町)二二一
 大町山岳博物館
 印刷所 大町市下仲町
 大糸タイムス印刷部